

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.37)

「歴史はかく書かれる」

・・・歴史の教えるもの・・・

何故、キューバなの？と問われても答えに窮するのだが、実は先ごろキューバへ3泊4日の旅をしてきた。詳しい内容は省略するとして、想像したこと、過去の蓄積されていた知識と違う世界を見ることが出来た。・・・旅はして見るものである。

一例を挙げれば、他愛のないことかもしれないが、我々夫婦に語りかけるのに、キューバと同じ言語の他の中南米諸国の人々が、「スペイン語が話せるか」という常套語から入ってくることに異なり、多くの人が片言の言葉を含めて、いきなり英語で話してくることであった。

訪れたところは観光スポットが多かったこともあるだろうが、当地の政治体制から予想して、戦前の日本で行われた、「敵性語は使うな」という締め付けを想像していた自分が、根拠のない固定観念にとらわれていたことを知らされた。政治体制が異なり、アメリカと50有余年の間対立しながらも、表の政治の世界と、日々動いている庶民生活の実態は異なるものだ。

膨大な数の書籍やメディア媒体が、ありとあらゆる所に飛びかい、またインターネットなる情報怪物が、身近な生活に入り込んでいる世の中とはいえ、それを有効活用せず、ものの見方が歪んでいたら、正しい認識を得ることはできないということを、改めて確認できた旅でもあった。

上記に関連して、今回のタイトルに使った、「**Así se escribe la historia**」(アシ セ エスクリーベ ラ イストリア と発音し、意味はタイトルのとおりであるが、確かなこととされている事実も、虚偽が有ることを述べている)と言うスペイン語の諺が思い浮かぶ。

例えば、「人よ、国(1492)見つけたとコロンブス」、や「いよいよ国発見アメリカ大陸」などと、試験のためにゴロ合わせて暗記した、キューバを含む広大な中南米地域の歴史に大きな影響を与えた、クリストバル・コロン(コロンブス、1451年～1506年)の偉業について、われわれはどのように感じているだろうか。

私の若い頃に勉強した認識として、彼は困難な大冒険の航海の末、アメリカ新大陸を発見(到達)した偉大な人物だとか、アイデアの以外性の例えに言われる、「コロンブスの卵」などの言葉のように、どちらかと言うと好意的な捉え方をしていたと思う。

確かにコロンブスの新大陸到達の業績は、以後に巨大国家アメリカ合衆国の誕生など、世界史を大変換させたと言うことは事実で、先進国たる当事者にとっては、まさに「いよいよ国」であっただろう。

中南米は二つの文化の出会いと言われているが、コロンブス以降の先進諸国の対応を見れば、それは出会いではなく、初期の頃はスペインなどのヨーロッパ諸国による、「キリスト教芸術以外をみとめない彼らはまさに文化の破壊者」(泉靖一(1915～1970)著、「インカ帝国」、岩波新書)と書かれているように、一方の文化による他方の文化の征服と、略奪の歴史だった筈



イギリスの海賊から防御するためのモロ要塞跡(世界遺産)から、ハバナ旧市街を望む



である。近世に入っても中南米は激動に揉まれる。

「メキシコの悲劇は、天国からあまりに遠く、アメリカにはあまりに近いことだ」という言葉に象徴されるように、アメリカに国土の半分以上を奪われた(今でもアメリカの西海岸側に、ロスアンジェルスやサンフランシスコなどのように、スペイン語の名前の地域が多く残っている)、メキシコの悲劇例以外にも、アメリカはさまざまな手段を使って、中南米各地の国々に軍事介入したり、他国への侵略行為を続け、長い間混迷が続いたのである。(伊藤 千尋著、「反米大陸」、集英社新書より要約)

日本の歴史教育は、これらの事象については、余り触れていなく、まさにタイトルに記すまでもなく、発見という事実だけを偉大なものと強調していたように思う。

本便りは、これらの所業について報告するつもりではないので、これ以上のことは書かないし書けないが、“歴史”は過去の事象や事実を探求する、学問の領域であると思ってしまうが、しかし、世の動きを見ていると、国によってはタイトルに込められた意のように、時には歪曲したり、拡大解釈したりしながら、相手を屈服させ、自分の側につけさせるための強力な武器として、“歴史を語ること”はまさに政治であり、軍事そのものなのかもしれないなどと考えてしまう。

泊まったホテルから程近い所に、キューバに立ち寄った最初の日本人と言われる、慶長遣欧使節団の仙台藩の支倉常長の像があった。コロンブス新大陸到達から、120年余、彼が異文化交流の先駆者として、当地に着いたとき、何を考えたのだろうか。

それから約400年後の今回、彼と同じように、メキシコからキューバへ降りたボラッチョ・ボニート氏の感慨とは、多分に異なっていることだろう。

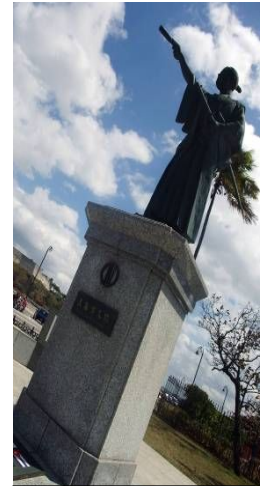
キューバにゆかりのある、ノーベル文学賞受賞者、アーネスト・ヘミングウェイ(1899-1961)の作品に、『老人と海』というのがある。キューバの老漁夫サンチャゴは、長期間の不漁のあと、ひとりメキシコ湾に遠出し、2昼夜にわたる苦闘の末、ついに巨大なマカジキを釣り針にかけるが、帰途、船縁に縛り付けた大魚は、港に付くまでにほとんどサメに食べられてしまう。

一生懸命頑張って手に入れた成果も、最後には無に帰してしまう。しかし、これはまさに人生の縮図のような気もする。最後の成果は結果的に得られなかったと言われても、それを得る為に、全身全霊を注ぎこんだという悲壮感が作品からうかがわれる。

ボラッチョ・ボニート氏もこの小説の老人に自分を投影させながら、『誰がために鐘は鳴る』、『武器よさらば』などの作家でもある、ヘミングウェイが好んだ、モヒート、ダイキリなどの、ラム酒のカクテルの杯を重ねるのであった。

しかし、ハバナ市内各種ホテルの国旗掲揚ポールには、日本の国旗は見られなかったのは残念だったが、それにつけても、キューバのラム酒の古酒は、味がよかったなあ！

(2010年3月15日)



こんな所にも日本との関係が……キューバに最初に立ち寄った(1614年)と言われている支倉常長の像)



作家ヘミングウェイが長期滞在していたホテルと内部の一部

次ページにも写真があります

キューバ旅行より



革命記念博物館とハバナ市内で数多く見られる、時代がかかったアメリカの中古車と各国の新車の対比



国内のいたるところに見られるチェ・ゲバラの肖像画風景



キューバ名産葉巻の製作実演



革命広場に勢ぞろいした2人乗り小型タクシー(椰子の実に似ていることからココと呼ばれている)



ハバナ旧市街(世界遺産地域)に見られる古い大砲を使った車止め



ピニャーレス溪谷の巨大鍾乳洞(世界遺産)